

幻椀久 (幻椀久)

栄華は昨日の夢さめて

うつつに迷う今日の身は

法師ほう師は木のはしと

思うは野暮よ分知らず

心の花の色も香も

知らせたいぞやはつちはち

いつの頃より逢い初めて

愛しいとしのその末の

末の松山思いのたねよ

今は心も乱れ候さりとは

死のうかの

工工どうともせ

とかく恋路の濡衣

ほさぬ涙の露の玉

「これは御存知のはつちはち

衣は墨に染めれども

まだ加羅の香は消えやらぬ

傾城買のなれの果て」

「粋法師のはつちはち

椀久法師のはつちはち

「フフフフハフフフ

ヤ何やら聞こゆる

才才騒ぐは洒落居るわ

こりやとんと面白そうじゃわい

どれ我等もそれへ推参申そう」

「狂い乱れて他愛なく

松を目当てに来たりける

「ヤ、松ぢや、太夫ぢや」

松山太夫であつたよのう」

「我身は姿かわれども変らぬ松のみどりこき

色もなつかし

なつかしの

君がかんばせ

たゞ一と目

「見たい逢いたい恋しさの

こつじこつじてものぐるい

「椀久さん ようござんしたな」

「才太夫か久しや、久し振りの逢瀬に

やそちや菊市その盃は」

「お気に入り廓八景蒔絵の大杯」

「才才、でかす」

サこれへ受きよう

ヤ甘露

こりやとんと昔じゃ

昔ながらの菊市の

三味も久しいのう

サ唄え聞こつぞ」

「君は花かや花なら散るに

秋の紅葉の色まさる

日数積もれば色増さる

「梅の匂いを桜にかして

君のたぶさにささせたや

青葉のままに眺めたや

「アア面白い」

これ太夫面白いと言つても

そなたに逢つた束の間の楽しみ」

「この椀久は過ぎし頃

破れし袖の恋衣

ぬいで別れしその後は逢の宿にただ一人

床離れ行く暁の

そのきぬの面影を

問えど答えずしよんぼりと

昨日は今日の昔にて

そも我ながら浅ましや

「のうそのかこち言我もまた

同じ思いの宵ことに

月に便りを松山の浪越すばかりうき涙

願い叶いしこの逢瀬

乱れし糸の破れ衣

恋も情も捨法師

変わり果てたるなりかたち

おんいたわしのお姿やと

たださめざめと泣くばかり

「そのお嘆きも

こうお逢いなされる上は御無用

サこの上は昔の通り」

「ほんにそうじゃわいな

今更言つても詮ない事」

伏屋の軒に見る月も

廓の窓に差す影も

光は同じ法の徳

姿形は変われども

心ころろは二世三世

変わらぬ色と誓いてし

言の葉ぐさのいちに

忘れかねては繰り返す

千束の文の数々を

そらで覚えて候かしこ

「さあ出来た

これで御機嫌が直つた松風さん

繁野さんサ華車どのもここえ

わつさりとやりかけましようか

「才菊市よう気が付いて給つた

ソレはなじゃ皆にやりや」

花と雪とはどれが吉野の眺めやら

花やら雪やら

どれが吉野の眺めやら

松と浪とはどれが露やらしぶきやら

別れの袖にはどれが露やら涙やら

どれが松やら松山の

姿もさとの夕暮も

ありしかたちは幻の

寄らんとすれば頼りなく

縋らんとすればうたかたの

消えて残るは松風か

むせぶが如き浪の音

泣いつ笑いつ狂乱の

狂い疲れて足立たず

芝をしとねに伏したるは

目もあてられぬ風情なり。